

# やまぶき

田舎の和算研究の個人通信

(題字 伊藤武夫氏)

4

第53号 平成三〇年(二〇一八) 八月一六日

発行部数 十五部 (不定期刊行)

発行者 東京都羽村市

山口 正義

(前号の続き)

## 関孝和の少年期と養子先 (二)

### 四、松木新左衛門始末聞書

松木新左衛門(一六五六―一七一五)は戦国時代からつづく駿府の豪商。五代のときが最盛期で、元禄十一年江戸上野寛永寺根本中堂建立の際、用材請負で紀伊国屋文左衛門とともに十両の巨利をえたという。文献(9)には「松木家は駿河の豪商である。孝和の祖父と父は駿河大納言に仕えたから、当然松木家とは親しくなった筈である。その証拠を『鈴木武雄著、静岡県の数(昭和57年)』が初めて示した」とあるが、残念ながら「静岡県の数学」を探すことは出来なかった。

一方、文献(8)には「松木新左衛門始末聞書」が紹介されている。新左衛門の栄枯盛衰を記録したもので、安永八年(一七七九)塗師屋平右衛門の筆により新左衛門の死後六十五年に書かれたものである。

この「聞書」には三ヶ所関新助の名が出てくるという。その一つは「算者会合の事」という節の中に出てくるもので、次のようなものである(8)。

\* \* \*

「日向国より算者来て新左衛門へ申様、大唐より渡りたる算本三巻の内、一冊損亡して此書海内に闕所す、今一兩人相手を尋て、新に考出して全部に調達し度願望にて遙々と是まで来るなりといふ、然るに新左衛門の朋友に、御代官の手代関戸条右衛門といふ算者有、三人同道して江戸へ行、今一人相手を取るべし、しかも宜(よ)き心当有といふ、関戸を初めて三人江戸へ同道し、御勘定方に関新助様という人は新左衛門知人にして、算者の聞えあれども其事は未だ談ぜず、行て語りたれば悦びける、則二人を引合て、四人合体して勘語す、新助様は病氣と称して籠居す、三人は珍味美食を忘れて肝胆を摧ぐだいて四人勘書を毎度突合せ見て、いざ是にて宜しと四人手を打し日は、発端の日より百七十五日なり、其考へ

しは終日終夜とぞ、時に新助様を師と崇め、流儀を関流と号して、拾遺共に二冊板行改彫しける、書林より関氏へ年々徳用貢べき約束して、面々数冊を取持て、我国々へ退散すと承る。駿府に於て、宝暦、明和の頃迄残る算人は、悉く皆新左衛門が弟子也、駿府の者普く知る処也。割注…日向の算人の事、委しく聞ず」

# # #

この中の「拾遺共に二冊板行改彫」の拾遺について、文献(9)は「拾遺諸約之法、付翦管術解、関孝和編、天和三年(一六八三)」を指すのではとして、このとき孝和は四十歳を過ぎ、新左衛門は二十歳頃であろう、としている。勿論それ以前に孝和と新左衛門は古い知り合いであることはわかるが、何時頃からの知り合いなのかは不明である。

平山諦は文献(9)の中で、「孝和は江戸で父母に死別されてから駿河の松木家で養育されたものであるまいか?」との仮説をたて、その根拠を次のように述べている。「その時新左衛門はまだ生まれていなかったため、四代新左衛門(一七一五年八十五歳で没。奇しくも同年に五代も没)に世話になったということか」

\* \* \*

「松木家には東西から商人が集って来た。十歳にも成長した孝和は商人のやるそばんに興味を持ったに違いない。すでに塵劫記は数

種も出版されていた。

十四、五歳に成長した孝和は承応二年（一六五三）に出版された九数算法を見落としたことはあるまい。著者の嶋田貞継は同じ駿河の人である。この書によって一通り数学を学び得たことは勿論であるが、この書の十九年七閏の法の説明は特に丁寧である。孝和を暦学の道に導くに充分であった。」

# # #

孝和の学問の真の目的は暦術の研究であるとし、それは「駿河の地で始められたのではないか？」というのが二つ目の平山の仮説であった。続けて次のようにいう。

\* \* \*

「明暦元年（一六五五）に再版の出た百川忠兵衛の新編諸算記によつて孝和は開平・開立の法を習得したのであろう。かくして藤岡茂元の算元記、初坂重治の円方四巻記、柴村盛之の格致算書（以上孝和十七歳のとき）などの出版があった。（途中略）」

孝和の数学に徹底的に影響した村松茂清の算組の出版は孝和二十三歳の時であった。このように次々に出版された算書は松木家に東西から集った商人の手によって速かに入手したのであろう。また伊豆の三島の暦師から解説の指導も受けられたであらう。

何より重大な事は、野沢定長の童介抄（孝和二十四歳のとき）の出版である。この書で孝

和は奈良のお寺に楊輝算法が所蔵されているのを知った。急いで奈良（駿河からは五日間ぐらいの行程）に行つて写しとつて帰った。これによつて、孝和の学力は急に向上したと言ふ。」

# # #

私はこれらの信憑性を論評出来ないが、和算学者・平山諦が最晩年に書き残したことを思う時その重さを感じる。ただ、三項の「二十六歳頃に関十郎右衛門の跡目相続」との整合性を考える必要がある。駿河にいううちに甲府藩士の関十郎右衛門の養子に入つたのだろうか。少し無理があるような気がする。

そして三つ目の仮説として、「孝和は寛文五年（一六五五）二十五歳の頃には上州へ移つたのではないか？」という。その根拠も説明しているが、ここでは割愛する。

## 五、養子・新七郎のこと

孝和の養子新七郎は、孝和の弟・永行（松軒）の子と『断家譜』にある。孝和が宝永五年に亡くなると、遺跡を継ぎ（二百俵）、享保九年に甲府勤番となつてゐる。そして享保二十年八月六日重追放となり関家は断絶する（『断家譜』）。その理由は「同僚の輩と参会し、博奕せし事露顕し」と『寛政譜』にあるのみである。

しかし、調べて行くと単なる博奕のみでは

なく、もっと大きな事件とかかわりのあることが判明する。それは享保十九年十二月二十四日の夜に発生した「甲府城御金蔵破り」、あるいは「御城内御金紛失一件」と呼ばれる事件との関連である。

この夜甲府は、ある文献では大吹雪といい、別の文献は大風雨というのだが、甲府城内の御金蔵が破られ、小判三百九十三両二分、甲金千二十九両三分、計千四百二十三両一分が盗みとられた。勤番士たちにとっては不名誉極まりない出来事であった。事件を重くみて江戸表から勘定奉行松波筑後守、目付松前主馬らが来甲した。

『徳川実記』の享保二十年正月十九日の条には、「去年十二月廿四日甲府城に賊あり。庫中の税金うせけるをもて。査檢の事仰かうぶり。勘定奉行松波筑後守正春。目付松前主馬廣隆いとま下さる」とある。

だが、一カ月余り取り調べたが、肝心の犯人を挙げられなかった。しかし、関係者の処分は出た。

平常警衛の怠慢を責められ勤番支配の宮崎若狭守は寄合に降格となったが、同職の建部民部少輔は転勤して間もないため御目見を止められたのに留まった。この建部民部少輔は孝和高弟の建部賢弘に連なる建部一族であったが、辛うじて処分を免れたのだ。しかし、当番勤番士十七名についてはそうは行かなか

った。虚偽報告六名と博奕をしていた十一名である。

この後者について『徳川実記』の同年八月五日の条には、「甲府勤番原田藤十郎某。関新七郎某。永井権十郎某。八木三郎四郎某。依田源太郎某。富士巻四郎某追放たる。同心四人も同じ。これ博奕の罪によりてなり。組頭能勢清兵衛頼胤は。居宅にて下部等あつまり。博奕せし事あらはれ。常の曉諭のとどかざるをもて。差控を仰付らる」とある。『断家譜』によれば、ここに出て来る原田藤十郎ら六名はいずれも重追放で家は断絶している。関新七郎も含まれているのである。事件の当日は勤番士なのに博奕をしていて二重の罪ということだったのか。重い処分だった。

なお、「甲府御城内御金紛失役人御仕置一件」<sup>(10)</sup>という古文書には次のようにある。

\* \* \*

(略)

甲府勤番

建部民部少輔支配

原田藤十郎

永見新右衛門支配

関 新七郎

同人支配

永井権十郎

八木三郎四郎

依田源太郎

富士巻半四郎  
其方共儀原田藤十郎八木三郎四郎宅<sup>三</sup>寄合博奕致し候段  
不屈之至<sup>三</sup>候依之重き追放被仰付者也  
(略)

卯八月五日

右両日之御仕置建部

民部少輔殿於御役屋鋪

御目付松前主馬殿民部少輔殿

御列座<sup>三</sup>被仰渡之

# # #

また、お家断絶後の記述が『増修日本数学史』に二ヶ所次のようにある。

\* \* \*

「享保年間、関家断絶す。新七(孝和の養子)賢弘が家に食す。この時、新七と謀りて、師孝和の秘書、円理弧背術を校訂して、一書を全うす。これを円理弧背術と曰う。これ関流において、極めて秘宝とす」とあるが三上は疑問を呈している。(同書251頁)  
「享保二十年家禄を没せられ、家名絶ゆ。新七、身を寄するに所なし。孝和が高弟賢弘が家に食客たり。その秘蔵する所の孝和が遺書を賢弘に与えて、その校を受け、これを以て、始めてその全きを得たり」。(同書258頁)

# # #

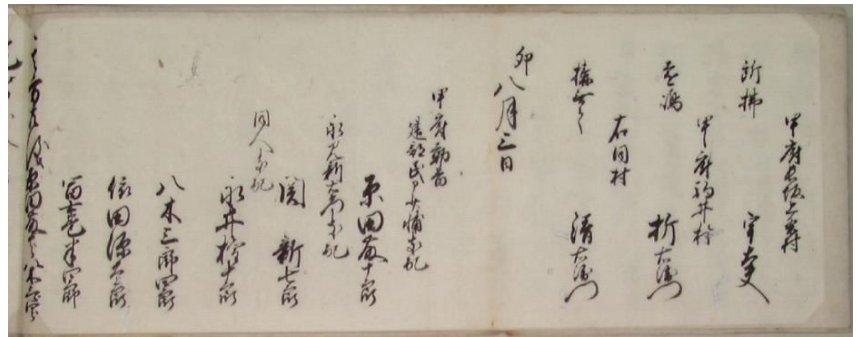
新七(郎)のその後のことはわからない。

なお、犯人高畠村の次郎兵衛は八年後の寛保二年(一七四二)三月に捕まり、六月十八日引き回しの上磔になった。ある文献には引き回しの順路もある。

参考文献

- (1) 『明治前日本数学史』(第二巻、1966年)
  - (2) 『新訂 寛政重修諸家譜』(続群書類完成会、平成二年)
  - (3) 『寛政諸家系譜』
  - (4) 猿渡盛厚『武蔵府中物語(上)』(昭和38年10月刊、大國魂神社発行)
  - (5) 『断家譜 第三』(続群書類完成会)
  - (6) 真島秀行「関孝和三百年祭に明らかになったこと」『数学史研究』200号、2009年
  - (7) 真島秀行『甲府日記』と『甲府御館記』にみえる関新助孝和(京大数理解析研究所講究録第1677巻2010年47-68)
  - (8) 鈴木武雄「駿遠(静岡)における関孝和と内山七兵衛永貞の消息」(京大数理解析研究所講究録第1677巻2010年37-46)
  - (9) 平山諦『和算の誕生』(恒星社厚生閣、1993)
  - (10) 「甲府御城内御金紛失役人御仕置一件」(甲州文庫)(山梨県立図書館甲州文庫デジタルアーカイブ(請求記号甲093. 6-134))
  - (11) 遠藤利貞遺著『増修日本数学史』
- 他に、弦間『和算家物語』、下平『関孝和』、『日本人の数学和算』、上野他『関孝和論序説』、『甲府市史』、『松木新左衛門始末聞書』(静岡市矢人家文書)などを参考にさせて頂きました。

(終り)

「甲府御城内御金紛失役人御仕置一件」の一部<sup>(10)</sup> (関新七郎の名が見える)

## 関孝和年表

| 西暦   | 和暦   | 歳  | 事項   |
|------|------|----|--|
| 1623 | 元和9  |    | (関五郎左衛門吉直、忠長卿に附属せられ、廩米50俵、大番を勤む)   |
| 1627 | 寛永4  |    | 内山家(吉明・永明父子)駿河大納言忠長に仕え駿府に移る  |
| 1632 | 寛永9  |    | 内山家(吉明・永明父子)忠長卿事件に巻き込まれ藤岡に移る   |
| 1637 | 寛永14 |    | 孝和出生説1   |
| 1639 | 寛永16 |    | 父母江戸に出て御天主番。(関五郎左衛門吉直、召しかへされ御寶藏番)  |
| 1640 | 寛永17 | 1  | 孝和出生説2   |
| 1641 | 寛永18 | 2  | 下総千葉郡上飯山満村(船橋市)の知行100石御藏米50俵。<br>家は江戸小石川   |
| 1642 | 寛永19 | 3  | 孝和出生説3(3月藤岡生れ、川北朝鄰)  |
| 1646 | 正保3  | 7  | 5月2日父永明死す、緑丁院日正信士、淨輪寺へ葬る<br>11月28日永貞、永明の遺跡を継ぐ  |
| 1656 | 明暦2  | 17 | 松木新左衛門生れる  |
| 1661 | 寛文元  | 22 | 甲府藩成立(江戸桜田殿、綱重25万石)<br>5月下旬孝和奈良で「楊輝算法」を写す  |
| 1662 | 寛文2  | 23 | 祖父吉明死す、正受院義天道虎、淨輪寺へ葬る  |
| 1665 | 寛文5  | 26 | 8月9日養父死す、雲岩宗白信士、淨輪寺へ葬る<br>11月23日甲府藩士関十郎右衛門某の跡目を継ぐ                                    |
| 1673 | 延宝元  | 34 | [4月16日関五郎左衛門吉直死す、83歳 法名宗空 府中高安寺へ葬る]  |
| 1674 | 延宝2  | 35 | 孝和「発微算法」書上る  |
| 1676 | 延宝4  | 37 | 孝和甲府宰相綱重に仕えている   |
| 1678 | 延宝6  | 39 | 綱重没、綱豊(後の家宣)が2代藩主になる   |
| 1680 | 延宝8  | 41 | 孝和「八法略訣」を著す  |
| 1681 | 天和元  | 42 | ～1688(貞享5)49歳 孝和「三部抄」「七部書」を著す  |
| 1682 | 天和2  | 43 | この頃、綱豊に勤仕か   |
| 1683 | 天和3  | 44 | 「拾遺諸役」成る   |
| 1684 | 貞享元  | 45 | 甲府藩の検地に孝和も従事   |
| 1685 | 貞享2  | 46 | 建部賢弘「発微算法演段診解」を出版  |
| 1704 | 宝永元  | 65 | 綱豊將軍世嗣として江戸城西丸に移る。孝和も幕府直属の士(旗本)となり、<br>御納戸組頭御藏米300俵・10人扶持                            |
| 1706 | 宝永3  | 67 | 11月4日致仕して小普請。10月1日新七郎綱吉に御目見。   |
| 1708 | 宝永5  | 69 | 7月25日孝和兄永貞死す、勤持院殿恵莊日随居士、淨輪寺へ葬る<br>10月24日孝和病没、法行院殿宗達日心居士、淨輪寺へ葬る<br>12月29日新七郎遺跡を継ぐ200俵 |
| 1715 | 正徳5  |    | 松木新左衛門死す、60歳   |
| 1724 | 享保9  |    | 8月13日新七郎甲府勤番   |
| 1734 | 享保19 |    | 12月24日甲府城御金藏破り事件発生   |
| 1735 | 享保20 |    | 8月5日新七郎博奕に座して追放、関家断絶   |
| 1779 | 安永8  |    | 「松木新左衛門始末聞書」成る   |

歳は1640(寛永17)年生まれを仮定している。

## 編集後記

関孝和の伝記をまとめてみよう、三上義夫の昭和七年の論文から最近の文献まで目を通したつもりだが、やはり伝記としてまとめ

るのは難しいの一語に尽きる。調べたことを無理に縮めたため、舌足らずのわかりづらい文章になってしまったかも知れない。  
甲府城御金藏破りの事件は、関家の断絶に

結びつき、それが我が国文化史上に重要な影響を及ぼしているとは一部の和算研究家しか知らないことで、一般にはほとんど知られていないことだろう。